

分門古今類事全集

第十四卷



谷崎潤一郎全集 第十四卷

定價一三〇〇圓

昭和四十二年十二月二十五日初版發行
昭和四十八年十一月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 高梨茂

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一一
電話（五六一）五九二一

振替東京三四

葦崎氏の口よりシュパイヘル・シュタインが飛び出す話

昭和八年七月號「經濟往來」

攝州岡本の里に葦池齋と呼ぶ好事の老人がある。此の人もとは東京の産なれども去る大正十二年關東震災の時箱根の山路を乗合自動車で疾驅しつつ未曾有の變事に遭遇し二子山より落下する巨岩怪石の霰の下を辛くも逃げのびて一命を完うしたが、その後横濱に居住してゐた妻子眷屬の立ち退き先を捜し求めて漸く十一日目に際會し、一家を擧げて關西に移住してより烏兔匆匆早くも茲に滿十箇年の春秋を閲した。寔に咽喉元過ぎれば熱さを忘れるとやら、老人今は松青く水清く冬暖かに夏涼しき攝陽の地に居を卜して、酒は近くの灘七郷より名だゝる芳醇を取り寄せ、瀬戸内の鮮魚と江州但州の牛肉と山城平野の蔬菜とを日々食膳に上す程にいつしか罹災民の氣分を失ひ天下に斯かる安住郷もありけるよと阪神沿線の風土を謳歌しつゝ關西人に同化してしまつた。

然しながら今の我が身の無事な姿を見るにつけ人の世の有爲轉變の測り難きを思ひせめて一年に一度ぐらゐは恐ろしかつたあの時の事を回想し治に居て亂を忘れざる心掛けが肝要であると殊勝な所へ氣が付き、毎年震災記念日に老人と同じく關西に居残つた舊罹災民の人々を自宅に招待して「九月一日會」と名づけ、心ばかりの酒肴をもてなして互ひに遭難の體驗を語ることにしてゐる。その會合も既に本年で十回に及ぶ譯であるが集まる者は年に依つて同じからず、又必ずしも關西居住者のみにあらず、老人が奇特の催しを聞き遠くは東京或は滿鮮地方より遙々と縁故を求めて馳せ參じ又は書簡を以て思ひ出を記して來る者があり、丹念な老人のことであるからそれらの會員の報告を丁寧に整理し、談話は自らその詳細を筆録し書簡

は悉く保存して「九月一日會文書」と云ふ抽出の中に收めてある。左に掲げるものはそれらの遭難の記録の中から最も奇抜にして風教に無害なる一篇を選び時節柄特に老人に乞うて發表の許可を得たものであるが、氣むづかしやの老人は安^{みだ}りに原文に斧^ふ鉞^あを加ふことを許さず「卑しき作家根性」を以て想像や潤飾を施すことは一切お斷りと云ふ條件を附けた。併し老人の筆録は御覽になれば分る通り大體談話者の談話を忠實に書き取つたものであるから、作者としても餘計な細工をする必要はないやうに思ふ。兎に角その邊のところは宜^{よろ}敷^{しく}御賢察の上讀んで頂きたいのである。

○

葦崎氏曰く、私の話は至つてたわいのない馬鹿々々しいものであります。それに此れは遭難談と申すことは出来ませぬかも知れませぬ。と申しますのは今夜お集まりの方々はいづれもあの時に非常なる危險に曝^つされ具^つさに艱難を嘗^なめられたのでありませうが、私は成る程地震に遭つたのでございますから遭難したことはしましたけれども、その遭難のお蔭をもちまして奇病に取り憑^はかれてをりましたのが圖^はらずも治癒したのでございますから、結局に於いて飛んだ仕合せに恵まれた譯であり升^あ。左様でございます。その奇病と云ひますのは、元來私、御覽の通り瘦せてをります癖に此れで中々の健啖^{けんたん}家でありまして、今日^{こんにち}でもさうでありますがあゝの當時は一層大食らひでありました。おかずは勿論でありますが御飯も朝が四五ぜん、晝と晩とは六七ぜんも食べたのであります。それでその結果といたしまして消化不良に陥つてをりましたものか年中胃が悪うございまして、尾籠^{びろう}なお話で恐れ入りますが、腹の底から噫^{おくひ}のやうな息が出ましてい

つも口中が臭うございました。然るにあの地震の年の春頃から口中の臭さがひとしほ猛烈になりました自分でも鼻持ちがならぬ程厭な匂ひが致し、始終生唾吐が出るのでありました。のみならず舌や齒齦や唇の内側がところどころ赤く爛れて擦りむけたやうになることがたびたびでありました。尤もそんなになりませぬうちに早くお醫者へ参りましたらよかつたのでございますが、どう云ふものか私は醫者が寔に嫌ひでありまして、齒醫者と來たら殊に禁物でございましたので、出來るならば自分で直してしまはうと存じまして、御承知でもございませうがコロノスと云ふアメリカ製の齒研きがございますな、あれで朝夕二回齒を研き、又オキシフルを十倍にうすめました含嗽劑を以て日に何回となくうがひを致してみましたが一向に利き目がございせん。それでも醫者へ行くよりはと思つて不愉快を休へてをりましたが外の事は我慢が出來ると致しまして、口中のたゞれること、分けても此の、舌の裏側の附け根の所、一寸失禮でございますが此處の所、此の邊が最も頻繁にたゞれますので、捨てゝ置いたら或ひは舌癌にでもなりはせぬかと云ふ不安が起つて参りました、女房には何も申しませんでしたでしたが獨りでそつと鏡を見ながら毎日クヨクヨと心配を致し、此れはどうも此の儘にして置いては宜しくない、矢張り醫者に診て貰ふより仕方がないと、私としましては、餘程の大決心に到達致しまして、それでも齒醫者は厭でございましたから、或る口腔科のドクトルの所へ参りました。するとドクトルの申しますのには、あなたは非常な亂杭齒である、かう齒並びが悪くては食物を充分に咀嚼することが出來ないからして胃が悪い、その結果腹中より惡氣を發散するからして口中が臭く、不潔になり、生唾吐が溜る、そこへ持つて來て飛び出した齒や引つ込んだ齒や八重齒などが犬牙錯雜してをるために唇や舌がそれに引つかゝつて擦り剥ける、その擦り剥けた所から

炎症を起す、應急の手當としては爛れた箇所を硝酸銀で焼いて上げるが、此れは是非共齒醫者へ行つて齒列を直してお貰ひなさい、齒列さへ直せば胃病も直り口中の故障も直るのであつて、すべての禍根は亂杭齒にあると云ふのでございます。いかさま、さう云はれてみればそれに違ひないのでございますが、舌癌になるやうなことはありませんかと聞いてみますと、まあそんなこともないでせうが、これではとても不愉快でせうから齒を直しておしまひなさい、さうしなかつたら根本的には治癒しませんから幾らでも口中が爛れますよと申しますので、なあに、舌癌にさへならなければ、命に別條さへなければいい、齒醫者へ行つて機械でガリガリやられた日には、過去の經驗に徴しても腦貧血を起すことは分りきつてをりますから、いつそ此の儘で辛抱いたさうと存じまして、折角ドクトルの注告を用ひずに、依然としてコリノスやオキシフルで胡麻化してゐたやうな次第でありました。それが常識で考へましたら、そんなに口中が臭かつたり爛れたりしてをりましたら自然氣分もすぐれませぬし、食慾も進まぬ道理でございますが、私の大食らひは餘程病的になつてをつたとみえまして、さう云ふ狀態でありながら、時分時になりますと人並み以上にお腹が減つて参りまして、お膳にさへ向ひましたらガツガツと物が食へると云ふ、重寶と申しませうか、因果と申しませうか、寔に早やさましい體質でございますので、三度々々の食事がおいしく食べられ、ば口の臭いぐらゐなことは大した差し障りにもならぬと、性來の不精も手傳ひまして捨てゝおいたのでございます。けれども、さうは申ししても臭いことはとても臭いのでございます。それに生つばきでございますが、表を歩きます時は無闇にべつべつと往來へ吐き散らし、家にをりますと座右に痰壺を備へておきまして、二分おき、三分おきぐらゐにそれへ吐き出しませぬことには、口の中がぬるぬるした液

體で一杯になります。忘れもいたしませぬが折悪しく入梅の季節に這入りまして、いろいろな物が醗酵し易い陽氣になつて参りましたので、その臭さと申しましたら、全くどうも自分の口でありながら腐つた五味溜めかなんぞのやうな匂ひがするのでございました。すると、さあ、あれはたしか七月の上旬頃でございましたらうか、或る日私は食事をしながら不思議な現象を發見致したのであります。それは何かと申しますと、此の頤の下、ちやうど此の淋巴腺のありますあたり、此所所でございますな、此處にあなた、療癰のやうなグリグリが出来てゐるのでございます。最初は、オヤ變なものが出来たぞと思つただけでございまして、間もなくそのグリグリは一時間ぐらゐの後に消えてしまつたのでございますが、又その次ぎの食事の時に、今度は此處が前よりも一層大きくふくれるのでございました。でもをかしいことには三十分か一時間ぐらゐの間にだんだん小さくなりまして、いつの間にか跡形もなく消えてしまひます。尙注意してをりますと、食事の時に限つてさうなる、物を咀嚼いたしますと必ず頤の下がふくれて参り、それ以外の時は何事もない、だから療癰とも違ふことは明かでありまして、實に奇病でありました。私は念のためそうつと一と間へ閉ぢ籠りまして、誰にも見られませぬやうに、ひとり鏡に向ひながら鹽煎餅をバリバリ齧つてみたのでございますが、従つて噛めば従つて膨れ、噛むのを止めませぬ限りは際限もなく膨脹いたしまして、忽ち頤の下が風船玉のやうになりました。此處に至つて最早や奇病に取り憑かれたことは疑ふ餘地がないのであります。私は恐怖のあまりにヤケクソになりまして、滅茶苦茶に煎餅を齧りましたが、しまひには風船玉が破裂しさうな勢ひを示して参り、何處迄ふくれるか底が知れなくなりましたので急に止めました。併しそんなに膨れまして、止めさへすればやがて常態に復すると云ふところが寔に

珍妙でありまして、恐らく皆様方の中で斯かる奇病に取り憑かれた方は一人もおありになるまいと存じますが、これに氣が付きました時の私の悲觀と狼狽とが如何なる程度のものであつたかは、お察しを願ひたいのであります。それにそのグリグリは、餘りふくれますと願ひつかへて邪魔にはなりますが、痛くも痒くもございませんので、尙更氣味が悪いのでございます。何よりも私は、女房子供に此れを發覺されることがイヤでありました。と申しますのは、私は非常にはにかみ屋なのであります、その上に又、病氣に對して甚だしく神經質で臆病なのであります。私が醫者を嫌ひますのも、實を申せば餘りに神經過敏になります結果でありまして、例へばほんのちよつとした風邪とか腹痛とかの場合でも、もう直ぐ死の豫感を抱きまして何か特別にむづかしい病氣でもあるやうに、重大に考へます。そしてとても此の病氣は醫者なにかに分るものでないと云ふ風に獨りぎめにしてしまふか、或ひは反對に、萬一醫者が不治の宣告を下したならば一層恐怖が募るだらうと思ひますので、どうも診察して貰ふ勇氣が出ないのであります。でございますから、病氣の時はいつそ誰にも知らせずに獨りでクヨクヨ案じてゐる方が氣が樂なのであります。人が構つてくれない方が神經が安まるのでございます。家の者などが「顔色がお悪うございます」とか「熱があまりのやうです」等と餘計なことを云ひますと、扱はもう人目につく程症狀が進んで參つたのかと、覺えずギョツと致しますので「黙つてゐろ、馬鹿」と、非常な見幕で叱りつけるのでございます。そんな次第で、女房も子供もその呼吸をすっかり呑み込んでをりますものでございますから、私が病氣になりますと、決して傍へ寄り着きません。蔭では心配してゐるらしいでございますが、それさへ私に感づかれぬやうに致しまして、平生よりも却て餘所々しく、そつけなく振る舞ひまして、私の方から「工合が

悪い」とか「醫者を呼んでくれ」とか云ひ出しませぬ限りは、見て見ぬ振りを致してをります。けれどもこれが、内臓の病氣でございましたら見て見ぬ振りも出来ませうけれども、三度の食事の時、生憎あいにくと一家團欒だんらんの際に起る現象でありまして、自分でも荷厄介にする程願の下がふくれて参るのでございますから、知らん顔をするにしましても中々むづかしいございます。尤も、食物の量を減らしまして、咀嚼そくさすることを少くいたしましたらば膨れ方も少くて済むのでございますが、日頃の大食らひが俄かに食を節しましたら、此れ亦家族の訝あやしみを招きますから、減らす譯に参りません。晩飯のおかずは必ず五品以上ときまつてをりましたので、家族の者も、私が黙つてをります以上、勝手に品数を減らしましたら變に氣を廻したやうになりますから、矢張りきまつた數だけは何や彼やと取り揃へるのでございます。私はおかずがこてこてと並んでゐる膳の上を見渡しまして「ああ、又願が膨れるのかなあ」と、聊いさかウンザリ致しながら強ひて平然たる態度を装ひ、しかし内心はどうか膨れて來ないやうにとヒヤヒヤしながら箸を取るのでありました。そして女房子供たちに訝あやしまれない程度に於いて、出来るだけ、そろりそろりと咀嚼そくさしつつ嚥下えんげするのでありました。ところが又意地の悪いことには、私は油ツこいものが好きでありまして、日に一遍は洋食をたべませぬと物を食べた氣が致しませんので、ビフテキ、チキンカツなどがきつと一皿は附いてゐるのでございまして、これを平げますのには實に苦心いたしました。何しろ肉でございますから、どんなにゆつくり咀嚼そくさしましても、自然と願を使ふ度數が多くなりまして、見る／＼うちにゴム毬のやうにふくれて参ります。それを感付かれまいとして、眼を白黒させながら成るべく咽喉を見せませぬやうに俯向いて食べるのでございますが、いくら俯向いても大きな塊が願の下に迫せり出して参り、もくもく持ち上

つて参りますので、到底隠しきれないのでございます。で、仕方がございませんから、肉を大きく切りまして、一と思ひに鵜呑みに致してみましたが、中々それも苦しい藝當でございますし、さうしましても絶對に頤を使はぬと云ふ譯には参りかねますから、どうしても幾らか膨れて参りまして、その切なさと申しましたら、何の因果でこんな思ひをして迄も肉を食はねばならないのかと、恨めしくなつて参ります。恨めしいと申せば、家族の奴等も若し氣が付いてゐるのだつたら、せめて牛肉やチキンの料理だけは止めにして、柔かい物を食はせるやうにしてくれたいのに、又此奴等が馬鹿正直にきつと洋食を出すのでございます。奴等としましたら、氣が付いてゐない振りをするために尙さうするのも知れませんが、私の身になりますと、何もかも心得てゐやがつて、わざとそんないたづらをして己を困らせる氣なんぢやないかと、云ふ風な邪推も起つて來まして、毎晩々々、膳の上にある洋食を見る度毎に忌ま忌ましいやら腹立たしいやらで、思はず女房を睨みつけるのでございます。さう云へば私が肉をたべ出しますと、女房も娘も、とても氣の毒で見えてゐられぬと云ふ様子を致しまして、黙つて下を向いてしまひます。さうされると私の方はますます慌てて「ああ又ふくれて來たな」と感じ出すと同時に、キマリが悪くて顔が眞つ赤になるのでございます。その表情が又可笑^{をか}しいと見えまして、娘の如きは下を向いたまゝ一生懸命笑ひを休へてをりました。いや、ほんたうに唯今でこそ滑稽でございしますけれども、當時は全く心痛いたしましたので、これは何かしら、餘程悪性の病氣に違ひないと云ふ豫感がしたのでございます。それと申しますのも、恥をお話し申さなければ分りませんが、若い時分に梅毒を患つたことがございまして、例の醫者嫌ひから根治もせずに打ツちやつておきましたので、梅毒と云ふものはいつ何處を犯すかも知れない、いづれは何

かの形になつて再發せずにはゐないであらうと、だんだん歳を取るにつれて取り越し苦勞をしてゐたものでございますから、いよ／＼其奴がお出でなすつたに違ひない、此の間から舌が爛れたり生唾吐が出たりしたのも、どうも唯事たゞごとでないと思つたが、やつぱりかう云ふ事になる徴候だつたのだと、そんな氣がしたのでございます。さうなつて参りますと、尙更宣告を下されるのが恐くなつて醫者へ行く氣になれません。友人なぞにも口の悪い連中が揃つて居りますので、そんな奴等に見付かつたら何を云ひ出すか知れませんが、宴會その他の附き合ひに誘はれましても斷つてしまひ、家に引き籠つたきり暇さへあれば鏡の前で頤を撫でてみて、こんな情ない病氣ツであるもんぢやないと思ひながら、遣る瀨ない月日を送つてゐると云ふ有様。しまひにはもう、家族に顔を見られるのさへ億劫おくがせになりまして、食事の時にもてんで口を利きません、黙つて大急ぎで掻込んで、こそこそ書齋へ引き上げて來ては、鏡の前で膨れた頤と睨めつくらをしてをります。すると或る日のことでございましたが、晩飯の膳に就いてみるとどうした譯か飛び切りに大きな肉のピフテキがで、こで、こ皿の上に載つてゐるのであります。私は一と眼見るなりガツカリ致して、や、此奴を征伐しなければならんのかと、暗澹たる氣持ちに引き込まれて嶮しく女房を睨み付けながらもうかうなりやあ破れカブレだ。膨れるだけ膨れてみやあがれと、度胸を据ゑてその偉大なるピフテキと取つ組み合ひを始めたのであります。その時の膨れ方と申しましたら、實に壯觀でありまして、皿のピフテキが減るに従ひ頤の風船玉が大きくなる、やがて肉の切れをキレイに平げてしまつた頃には、下を向くことが出来ない程の未曾有な塊になりまして、而もそれが、尙刻々にふくれて参るのであります。流石さすがに私も眞つ青になりまして茶碗を持つ手をぶるぶると顫はせ、それでもじつと我慢しながら、覺えず

訴へるやうな眼つきで女房を見ますと、女房の方も心配で溜らなかつたらしく、さつきから私の顔色を横眼でチラチラ窺つてをりましたが、偶然眼と眼が合ひました途端に、

「ちよつと、それ一體何なんでせう。」

と、とうとう口を切つたのであります。

「うむ」

と云つて、私は唾吐をゴクリと一つ呑み込みましたが、頤の塊がそれと一緒にもくもく動くのであります。

「ねえ、何なんでせう。をかしいぢやありませんか。」

女房は私の神経を脅やかさぬやうに注意に注意致しまして、いくらか笑顔を作りながら云ふのでございませうけれども、内心甚だ無氣味に感じてをりますことは明かなのであります。ところで私も此の時ばかりは「餘計なことを云ふな、馬鹿ツ」と叱り飛ばす勇氣もなく、却つて女房の一言で急に重荷を卸した形で、

「何だか己にも分らんのだがね」

と、ほつとしながら云ひますと、

「でもほんたうに變だわねえ」

と、娘がぷつと吹き出しました。

「笑ひ事ぢやあないわ、全く」

と、自分で笑つて置きながら、今度はひどく眞顔になつて、

「お父さん、それ痛くないの。」

と云ふのであります。

「いや、格別痛いことはないんだ。」

「だけでも、邪魔になりやあしない？」

「そりや、邪魔にならないことはないさ。飯を食ふ時だけかうなるんだから、どうも變だよ。」

「ええ、さうよ、ちゃんと知つてゐるわよ。お父さんあんまり大食ひするもんだから、神様の罰ばちが中あたつたんだわ。」

さう云つて娘は又笑ひます。

「馬鹿だな、貴様達は。知つてゐるならなぜビテキやカツレツなんか食はせるんだ。柔かい物を拵へてくれたらいいぢやないか。」

「だつて、そんならそんな堅い物をなぜ上るのよ。お父さんがいつでもペロリと食べてしまふから、出さなければ悪いと思つて出すんだわ。」

「己の方は又、出てゐるから食ふんだ。」

「でも、痛くないと云ふのが變ねえ。」

と、遂に女房は膝を乗り出して、心痛の色を露骨に顔に現はしました。

「變だね、實際。何か悪性のものでぢやないかと、己も氣にしてゐることはゐるんだ。」

さう云ひながら照れ隠しに頤の所へ手を當てゝみますと、又さつきより大きくなつてゐるのであります。

「あなた、お願ひだからお醫者に診て貰つて頂戴よ。悪性のものであるかないか、病氣のた^ちが分るだけでも安心ぢやありませんか。」

「ほんたうよウ、お父さん、診て貰つた方がよくつてよウ。」

此の、單純にして沈痛なる最後の娘の一言は、今迄多少ユーモアを交へてゐた食卓の空氣をガラリと變へて、深刻無比な氣分にさせたのであります。彼等は俄かに怯えたやうになり、恐怖をありありと眼のうちに湛へて私の顔を視詰めながら、死んでしまつたら大變だの、あなたは自業自得^{じごふじちく}だけれども、残つた者をどうしてくれるのと、右と左から口を揃へて云ひ出しまして、果ては涙さへ浮かべると云ふ世話^{せわ}がゝつた場面が展開いたしました。

「いいよ、いいよ、診て貰ふから安心しなよ。」

と、私もついホロリとなつて、此方があべこべに慰め役に廻つたりしまして、その場はどうやら治まりましたが、扱その後で獨りつくぐ考へてみますと、何だか幸先^{さいさき}が宜しくくない。大體私が、女房子供にあんなことを云はれて、自分までが涙ぐんだりして、素直に彼等の注告を受け入れると云ふことが、全く前例のないことでありまして、それだけ氣が弱くなつてゐると云ふ事實は、死ぬ前兆であるやうに思はれる。

かと云つて、是非共醫者に診て貰はねばならない運命にあることは、此れ亦明かでありまして、實は私も、自分だけでは容易に決心がつきかねます所からして、のつびきならぬ情勢を作り上げるために、女房子供を内々加勢に引つ張り込んだ傾きもあるのであります。しかしいよいよ首の座に直る覺悟をしまして、診察を乞ふに致しまして、何しろ奇病でございますから、口腔科へ行つたらよいものか齒科へ行つたら